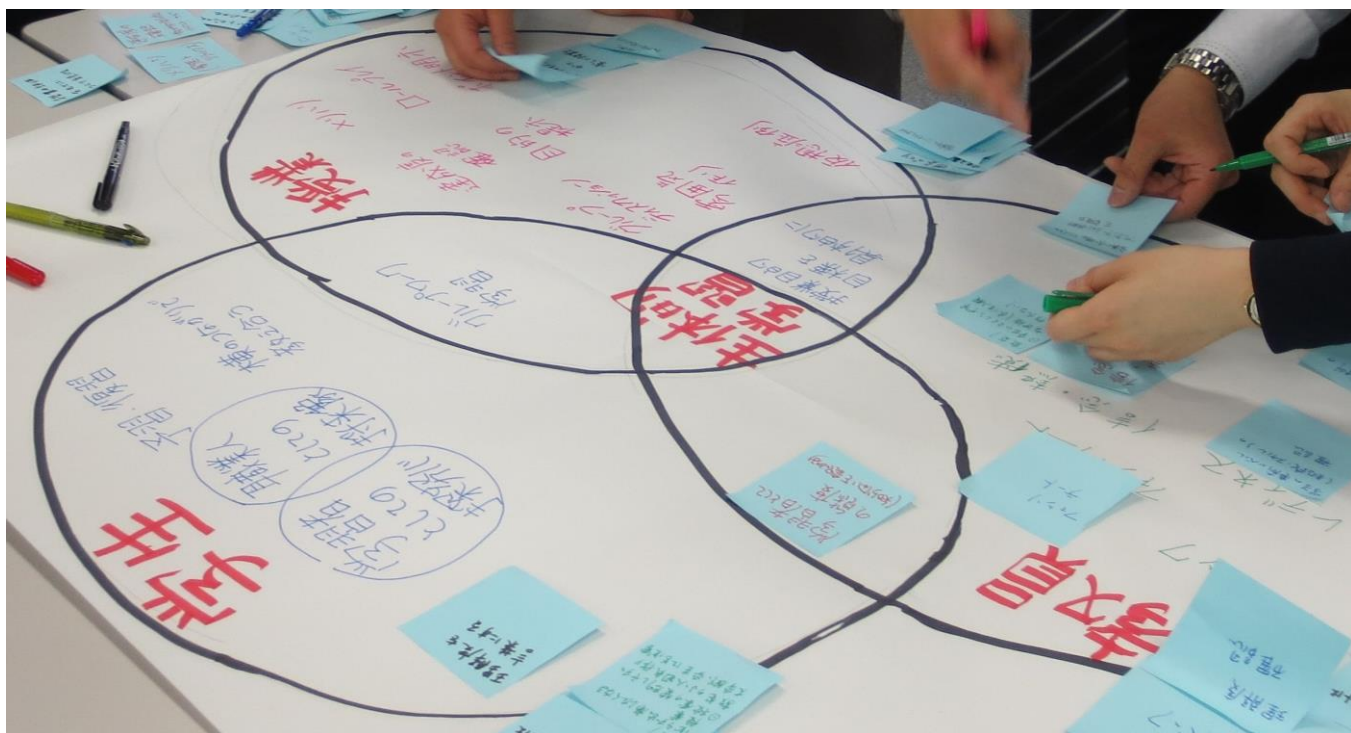


No.17 2016 (平成 28 年度)

CONTENTS

• 平成 28 年度全学 FD 研修 開催報告	2	• 平成 28 年度 授業公開 (参観) 実績報告	10
• 平成 28 年度全学 FD 講演会 開催報告	3	• 平成 29 年度シラバスの記載事項について	11
• 平成 28 年度学部・学科・学校等 FD 活動報告		• 全学 FD 研修「受講証明書」の発行について	11
① 薬学部・研究科	4	• 編集後記	12
② 歯学部・研究科	4		
③ 看護福祉学部・研究科	5		
④ 心理科学部・研究科	6		
⑤ リハビリテーション科学部・研究科	8		
⑥ 大学教育開発センター	9		
⑦ 歯科衛生士専門学校	10		



全学 FD 研修<基本編> ワークセッション (関連記事 2 ページ)

平成28年度 全学FD研修 開催報告

学生を中心とした教育を進めるために

平成28年度全学FD研修は、平成27年度から引き続き「学生を中心とした教育を進めるために」をメインテーマとして、例年通り春の〈基本編〉と夏の〈テーマ編〉の2回行われ、テーマにそった基調講演と研修参加者が数名ごとのグループに分かれてのワークショップによる構成を基本として行いました。

平成28年4月3日（日） 10:00～17:00

学生を中心とした教育を進めるために -学生の主体的な学習を促す授業づくり-

対象：平成28年度に新規採用された教職員および平成27年度に中途採用された教職員

会場：本学札幌サテライトキャンパス

概要：第1回全学FD研修〈基本編〉では、まず、浅香学長より、「医療系総合大学としてのミッションと目標」と題して、本学の教育理念と目標について講話が行われました。引き続き参加者自己紹介やグループづくりなどの後、昼の休憩をはさんで、今回の特別講師で北海道大学高等教育研修センター特任准教授の山本堅一先生によるレクチャー「学生の主体的な学習を促す授業づくり」、さらに山本先生をディレクターに少人数のグループに分かれてワークセッション「学生の主体的な学習を促す授業を考える」を行い、学生の主体的な学習を促すために求められる具体的な行動目標や方略などの授業設計について理解を深めました。



〈北海道大学 山本堅一先生〉



〈ワークショップ〉

平成28年8月4日（木） 9:30～16:30

学生を中心とした教育を進めるために -チーム基盤型学習（TBL）におけるファシリテーション-

対象：教職員・事務職員

会場：本学当別キャンパス 中央講義棟

概要：第2回全学FD研修<テーマ編>では、まず、特別講師の佐賀大学医学部教授・地域医療科学教育研究センター長の小田康友先生によるレクチャー「効果的かつ効率的な能動的学修カリキュラムを求めて -佐賀大学PBL・TBL運営15年の経験から-」では、「問題基盤型学習(PBL)」および「チーム基盤型学習(TBL)」について実践事例等を交えて概説されました。なお、レクチャーは全学FD講演会として、広くFD研修参加者以外にも公開され、多くの教職員が参加しました。午後のワークショップでは、5グループに分かれて「PBL vs. TBL 本学のニーズやリソースにマッチするのはどちらか」、さらに「能動的学修導入シミュレーション」についてディスカッションを行い、能動的学修プログラムの構築に向けての具体的な方策を探りました。



<佐賀大学 小田康友先生>



<ワークショップ>

平成28年度 全学FD講演会 開催報告

平成28年7月25日(月) 16:30~17:50

多職種連携教育を効果的に進めるために<看護福祉学部FD委員会との共催>

対象：教職員・事務職員

講師：千葉大学大学院看護学研究科 教授・専門職連携教育研究センター長 酒井 郁子 氏

会場：本学当別キャンパス 看護福祉学部棟

概要：千葉大学において展開している専門職連携教育プログラム「亥鼻 IPE」について、具体的な実践事例などを交えて講演がありました。

① 薬学部・薬学研究科

平成28年度薬学部 FD 委員会の活動方針として FD セミナー、セミナー&ワークショップをそれぞれ1回、隔月で薬学教育研究懇談会（薬学部・研究科共同）を開催することとした。また、本年度から薬学部 FD 委員会が主催する「先進的な取り組み視察事業」が始められた。

10月6日に、日本大学薬学部で行われている反転授業を取り入れた TBL を視察するため3名の教員が派遣された。

薬学部・研究科共同開催の FD セミナーとして、日本大学薬学部石毛久美子先生を講師にお招きし、10月28日に「薬学教育における反転授業の実践 –日本大学薬学部における TBL 導入の実際-」と題してご講演いただいた。日本大学薬学部では平成26年度より6年制4年後期の「テーラーメイド薬物治療を目指して」に反転授業を取り入れた TBL を行っており、その実情について伺うことができた。

8月19日には「ルーブリック評価の導入研修」として、FD セミナー&ワークショップを開催した。ルーブリック評価については薬学教育評価の改善項目となっており、各科目において早期にルーブリック評価を導入、活用していくことが必要となる。今回は、ルーブリック評価表の作成を中心として FD 研修を実施した。

薬学部・研究科共催の FD 活動の一環として平成24年度の11月から隔月で薬学・教育談話会を開催している。本談話会は、薬学部の若手教員の研究成果や教育に対する取り組みを紹介し、研究及び教育活動の活性化を図ることを目的としている。平成28年度は第18回から第21回までの計4回の薬学・教育談話会を開催した。4回の延べ参加者は180名ほどであった。

平成25年度から、退職される先生方の最終講義を伺うこともFD活動にとって有益であるとのことから、最終講義を教務委員会と共催で薬学・教育談話会の特別開催としている。本年度は、3月2日に2名の先生方の最終講義が予定されている。

② 歯学部・歯学研究科

今年度の歯学部 FD 活動では、①第1回歯学部国家試験対策 FD ワークショップ、②109回歯科医師国家試験の分析と110回国家試験医に向けての傾向と対策、③ これからの歯科医師に求められるものと題された研修が行われた。これらの研修会では、学部学生および大学院生に対する歯学教育の充実を中心に議論された。特に歯学部では、前年度の第109回歯科医師国家試験の合格率が著しく低かったことから（新卒の合格率が49.0%、既卒の合格率が35.0%、総合の合格率が42.9%）、国家試験合格率を上げるための具板的方策を作成することが喫緊の課題となった。①の FD ワークショップでは、国家試験予備校の担当者による、予備校で保有する全国規模での膨大なデータをもとに、

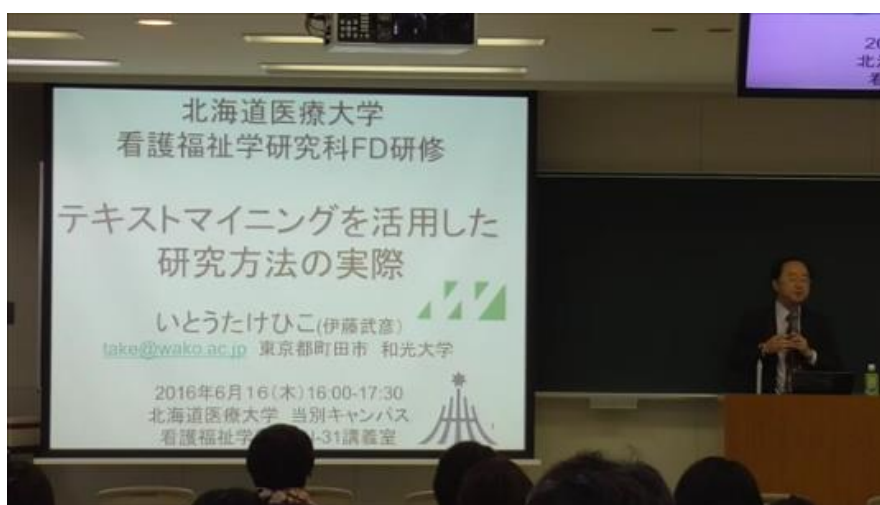
合格のために重要な問題の識別方法やそのために必要な講義方法について説明がなされた。このワークショップで得られた情報をもとに、最近の国家試験の出題傾向の分析と次回国家試験医に向けての傾向と対策に関する研修が開催された。この研修で提案されたアイデアのいくつかは今年度の6年生の講義スケジュールに導入された。

今年度の本学部・研究科でのFD研修は、国家試験の合格率のアップを目指した短期的な課題に終始した傾向があった。しかし、恒常的に高い国家試験の合格率を維持するためには、長期的視点に立った教育システムを構築する必要があるとあり、次年度以降は臨床実習の充実を含めた6年間の学部教育についてFD活動を進めていく必要があると考えられる。

③ 看護福祉学部・看護福祉学研究科

今年度、看護福祉学部・大学院看護福祉学研究科では、全学FD委員会との共催を含め2回のFDセミナーを開催しました(表参照)。いずれも、テーマに関連する領域の第一人者による講演・研修であり、参加者にとっては、現在進めている教育研究活動の推進にあたり有意義なセミナーとなりました。

2016年6月16日(木)には「テキストマイニングを活用した研究方法の実際」をテーマとして、テキストマイニングの第一人者である和光大学・現代人間学部・心理教育学科の伊藤武彦先生をお招きしてセミナーを開催しました。テキストマイニングは、ソフトウェア開発の発展にともなって実用化されてきた研究法であり、語りという質的な資料をデータマイニングによる量的分析により視覚化する技法として関心がもたれています。テキストマイニングを活用した研究方法の関心は高く、看護福祉学研究科の教員のみならず、大学院生や他学部の教員も含め、計45名の参加がありました。セミナーの内容は、テキストマイニングとは何か、何ができるのか、テキストマイニングで使用するソフトウェアの紹介、伊藤先生が取り組んでいる研究成果の具体例などであり、初心者でも理解しやすいものでした。参加者の多くから、今後の研究方法を考える上で役に立つ内容であったという意見が聞かれ、有意義なセミナーとなりました。



<研究科FDセミナーの伊藤武彦先生の講義>

2016年7月25日(木)には「多職種連携教育を効果的に進めるために」をテーマとして千葉大学大学院・看護学研究科教授および専門職連携教育研究センター長の酒井郁子先生を講師としてお招きして開催しました。本学では、チーム医療のなかで活躍できる医療人の育成を目指しており、「多職種連携教育(IPE)の充実」が本学における教育の特色となっています。看護福祉学部では、一昨年から1年次に全学教育科目である「個体差健康科学・多職種連携入門」、昨年から3年次にリハビリテーション科学部とともに「多職種連携論」を開講し、他学部の学生とともに多職種連携について学ぶ場を設けています。本学におけるIPEを効果的に進めていくために、教員がIPEの思想を共通認識し、教育に反映させていくことが必須となります。そこで、この研修会では、先駆的にIPEに取り組んでいる千葉大学専門職連携教育研究センター長の酒井郁子先生をお招きし、IPEについて理解を深め、どのような運用が成功につながるのか、考える機会とすることを目的としました。セミナーは、全学FD委員会との共催で開催され、参加者は他学部教員も含め37名でした。セミナーでは、千葉大学医学部、看護学部、薬学部の3学部からなる専門職連携教育プログラムとして開発され、2007年度からスタートさせた「亥鼻(いのはな)IPE」について、運用に至るまでの組織的な取り組み、参加している学生の映像、段階的に学修成果を評価するためのルーブリックの作成など、先生自身の実践経験に基づいた説得力のあるお話がありました。ちなみに、「亥鼻」は、3学部が所在する地名です。また、千葉大学のホームページ上で私たちにも活用できる様々な情報を発信していることもわかりました。参加者からは、これからIPEに取り組んでいく際に、大変参考になるという意見が聞かれました。

開催日時・場所	テーマ	講師
2016年6月16日(木) 16:00~17:30 看護福祉学部棟3階 N-31教室	看護福祉学研究科FDセミナー 「テキストマイニングを活用した 研究方法の実際」	和光大学現代人間学部 心理教育学科 伊藤 武彦 教授
2016年7月25日(木) 16:00~17:50 看護福祉学部4階 N-43教室	看護福祉学部FDセミナー 「多職種連携教育を効果的に進めるために」	千葉大学大学院看護学研究科 専門職連携教育研究センター長 酒井 郁子 教授

<表：平成28年度に看護福祉学部・大学院看護福祉学研究科で開催したセミナー>

④ 心理科学部・心理科学研究科

心理科学部・心理科学研究科では、臨床心理学科と言語聴覚療法学科の学生・教員の学術交流と相互理解を図る目的で学部発足以来、「臨床心理・言語聴覚セミナー」を開催してきました。教員のみならず、学生、大学院生の参加と活発な議論により、FD活動の柱となっています。平成28年度は、学部・研究科FD研修会として計2回の臨床心理・言語聴覚セミナーを開催しました。

以下、概要を記します。

第 64 回 臨床心理・言語聴覚セミナー

「言語関連遺伝子の解析」

講師：太田 亨先生（心理科学部言語聴覚療法学科 教授）

7月12日 17:10- あいの里キャンパス 講義室 201

内容（抄録より抜粋）：

DNA やタンパクの機能解析、いわゆる分子遺伝学解析手法によって、複雑なヒトの言語を研究するのは不可能に思えます。しかし、イギリスの 3 世代にわたり家族の半数近くに言語障害がみられる KE 家系の遺伝子解析の結果、メンデル遺伝を示す FOXP2 というひとつの遺伝子の変異が、言語のみの障害をきたすことが報告されました。FOXP2 は転写因子であり、さらに多くの遺伝子の発現調節をしています。この遺伝子群の解析は、言語の発達、進化を含め、なぜヒトは複雑な言語を話すのかの解明の糸口になるでしょう。今回、FOXP2 遺伝子の標的遺伝子について、現在私どもが解析していることとお話しします。

第 65 回 臨床心理・言語聴覚セミナー

「協力行動の適応的基盤」

講師：真島理恵先生（心理科学部 臨床心理学科 講師）

11月29日 17:10- あいの里キャンパス 講義室 201

内容（抄録より抜粋）：

利己的に撮る舞う方が得であるにも関わらず、なぜ人々は自己利益を超えて相互協力を達成することができるのか？という問いが、様々な分野から問われ続けてきた。社会心理学では長く、協力行動を促進する動機や感情などの至近的要因の解明が主な焦点とされてきたが、そのよう協力を促進する至近的メカニズムがなぜ人々に備わっているのかという究極因に対する答えは明らかにされてこなかった。本セミナーでは、人間に協力行動をとらせ、社会秩序の維持を可能とする心理・行動傾向は、結果的に個人に利益をもたらすために(進化ないしは学習により)獲得されてきた適応的特性であるとの視座から、人間社会の相互協力の適応的基盤について議論する。特に、人間社会特有の大規模な相互協力状況を可能とする原理を特定することを焦点とした理論的・実証的研究について紹介する。

いずれも、教員、学生の多くの参加をいただき、盛会に終わりました。

今後は学部再編のため、臨床心理に重点をおいた FD が開催されていくことと予想されます。

⑤ リハビリテーション科学部・リハビリテーション科学研究科

リハビリテーション科学部・研究科では、学部 FD5 回、研究科 FD1 回の計 6 回の FD 研修会を開催しました。

第 1 回リハビリテーション科学部 FD 研修会は、平成 28 年 6 月 21 日に開催しました。「ICT 機器でアクティブ・ラーニングを体験しよう」というテーマで、本学情報センター長の二瓶裕之先生より講義をしていただきました。ICT 機器を使った授業の実際例を提示していただき、学習効果や導入するために必要なことが理解できました。参加者からは、ICT 機器を授業に使える可能性が広がった、授業の組み立て方など参考になった、などの声が聞かれ大変有意義な研修であったと感じました。

第 2 回は平成 28 年 8 月 19 日に開催されました。大阪大学より佐藤浩章先生をお招きし、「パフォーマンス評価入門」というテーマで講義をしていただきました。知識や技術を臨床現場で実践できる能力を高めるためには、思考力・判断力・表現力を高める教育が必要であることと、

思考力・判断力・表現力といった、評価しにくい項目をどのように評価すれば良いのかを理解することができました。参加者からは今後の教育に活かせる内容であった、との声が聞かれ、大変有意義な研修であったと感じました。

第 3 回は平成 28 年 8 月 23 日に開催しました。「manaba 導入事例と本学における課題」というテーマで本学部理学療法学科の澤田篤史先生より、「manaba 導入例と本学における検討事項」というテーマで行いました。学部で導入した教育支援システム「manaba」についての概要や他の大学での導入例についてのお話がありました。研修会では、学生が主体的な学びを行うためにシステムをどのように活用していくべきかについて多くの議論がされました。

第 4 回は平成 28 年 9 月 29 日に、心理科学部の金澤潤一郎先生より「発達障がい傾向のある学生への（合理的な）支援とは」についての講演を行って頂きました。発達障害傾向のある大学生の特徴や、教員としてどのように関わるべきなのかを具体的な事例を交えてお話いただきました。参加者からは、今後の対応にあたり、大変参考になったという声が多数聞かれました。

第 5 回は平成 28 年 12 月 14 日に開催されました。ジョージア工科大学の篠原稔先生をお招きし、「エディターから見た英語論文の書き方」というテーマで研修会を行いました。様々な雑誌のエディターやレビュアーを経験された立場から、英語論文を作成する際のポイントについてわかりやすく講義をして頂きました。参加者からは、論文を書く上でとてもためになる内容であったとの声が聞かれ、大変有意義な研修会であったと感じました。



＜大阪大学 佐藤浩章先生＞



＜ジョージア工科大学 篠原稔先生＞

第1回リハビリテーション科学研究科FD研修会は平成29年2月3日に開催しました。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院の中野民夫先生をお招きし、「学び合う場を創るファシリテーション」というテーマで研修会を行いました。研修会では、学生が主体的に参加できる講義にするためのポイントについて、「えんたくん」というグループワーク用の小道具なども取り入れ、実際に体験しながら学びました。参加者からは、大人数の講義でグループワークを行うときの参考になったとの声が多数聞かれ、大変有意義な研修会でした。



<東京工業大学 中野民夫先生>

⑥ 大学教育開発センター

大学教育開発センターでは、平成28年度から、部門長および各分野主任により構成される「FD活動推進部門」を設けました。5月に初回の部門議会を開催し、本年度のFD活動目標を「ブレの少ないレポート評価方法の確立に向けて」と決定して、年間活動計画を立てました。その後、授業で論述レポートを課しているセンター教員に呼びかけ「レポート評価法確立」懇談会（6名）を結成し、事前アンケートに基づいて意見交換会・情報交換会を開催しました。この活動の成果として、本年度後期から2つの科目で「ループリック評価」が本格的に導入されました。

また、8月25日・26日に北海道教育大学札幌校で開催された第66回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会に3名のセンター教員を派遣してFD向上を図りました。この研究会には、毎年、センター教員を数名派遣しております。今年の研修内容（e-portfolioやInstitutional Researchの実践報告など）については、後日、大学教育開発センター教員会議で派遣教員から報告がなされました。

そして、ここ3年ほど連続実施し、ほぼ定例化した「全学教育懇談会」（大学教育開発センター教育実践報告会）を今年も3月15日に実施します。昨年までは、センター内部で実施しておりましたが、今年から全学公開の報告会としました。今回は、心理科学部の安部准教授から「初年次生を対象とした多職種連携教育（IPE）と評価尺度作成の試み」、薬学部の近藤准教授と看護福祉学部の薄井教授から「ループリック評価の実際」、薬学部の二瓶教授と心理科学部の西牧助教から「ICTによる科目連携型アクティブ・ラーニング」の演題で、それぞれ各30分程度で話題提供と質疑応答を行います。なお、「全学教育懇談会」終了後、場所を移してセンター教員のランチョン・ミーティングを開催し、教育上の情報交換を行う予定です。

⑦ 歯科衛生士専門学校

歯科衛生士専門学校独自のFD活動はありませんが、全学で実施されているFD活動への参加と北海道歯科衛生士養成機関が主催する研修（年2回実施）に参加することで情報を得ています。

今年度（平成28年度）の北海道歯科衛生士養成機関主催の研修会では、福岡短期大学歯科衛生学科より堀部晴美教授を講師にお招きし、「効果的なアクティブラーニングの進め方」について2日間に渡ってグループワークを行いました。グループワークでは、歯科衛生士の主要3科目である『歯科予防処置』『歯科保健指導』『歯科診療補助』の各分野において共通テーマを設け、各校の現状や課題について熱いディスカッションを行いました。

本校では1～3学年の学生150名（※各学年定員50名）に対し、校長ならびに専任教員5名の合計6名で各学年の指導にあたっております。特に専任教員が担当している実習科目においては、指導教員に対し対象学生が多いため、個人の技術の修得状況が把握しにくい等といった問題点を抱えている現状にあります。そのため、授業の中でもDVD媒体やジクソー法等をはじめとする様々なアクティブラーニングを積極的に活用して、学生の能動的な学修へと結びつけられるようにすることが今後の課題です。

次年度も積極的に各学部のFD活動や研修会へ参加し、本校の学生教育へフィードバックしていきたいと思います。

平成28年度 授業公開（参観）実績報告

教員の更なる授業改善と教育力向上を目的とし、教員が他教員の授業を参観する授業公開を、全学FD委員会が主導して、平成24年度から行っています。平成28年度及び平成27年度の実績は、以下のとおりです。

表. 平成27・28年度 授業公開（参観）実施状況

	平成28年度			平成27年度		
	公開科目数	のべ講義コマ数	実参観者数	公開科目数	のべ講義コマ数	実参観者数
前期	39 科目	101 コマ	50 名	28 科目	79 コマ	38 名
後期	22 科目	61 コマ	23 名	17 科目	40 コマ	22 名
合計	61 科目	162 コマ	73 名	45 科目	119 コマ	60 名

平成29年度シラバスの記載事項について

平成29年度シラバスの作成にあたり、文部科学省の中央教育審議会答申における「大学教育の質的転換」の趣旨に基づき、下記の事項をシラバスに記載することについて、全学FD委員長から全教職員に対して要請しました。

- ① 準備学習（予習・復習等）の具体的内容及びそれに必要な時間
- ② 授業における学修の到達目標及び成績評価の方法・基準
- ③ ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）と当該授業科目との関連
- ④ 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックを行うこと

【参考】

文部科学省 中央教育審議会 答申（平成24年8月28日）

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」《抜粋》

・教育課程の体系化

大学、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示されること。なお、大学として学位授与の方針に対して授業科目が過多であったり、科目の内容が過度に重なっている場合は、精選の上、体系化が行われる必要がある。

[後略]

・授業計画（シラバス）の充実

学生に事前に提示する授業計画（シラバス）は、単なる講義概要（コースカタログ）にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するよう作成されること。

(*アンダーライン：引用者)

全学FD研修「受講証明書」の発行について

全学FD委員会が主催（共催）する研修事業については、平成27年度から、研修受講者の求めに応じて「受講証明書（受講証）」を発行しています。

証明書（受講証）の発行を希望する場合は、本学ホームページの「学内専用」の「FD活動」ページから「FD研修受講証交付申請書」をダウンロードして、所定事項を記入のうえ、教務企画課FD研修担当あてに、ファイル添付でメール送信（fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp）してください。

編集後記

皆様のご協力により、今年度もFDニューズレター第17号を発刊できる運びとなりました。ご協力いただいた方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。今号では、北海道医療大学で行われました平成28年度FD活動を中心に、ご紹介させていただきました。本学、そして皆様方の益々の発展に、少しでもお役に立てればと願っております。

発行日 2017年3月

発行元 北海道医療大学 全学FD委員会

編集委員 千葉 逸朗(委員長)、○遠藤 泰、○石倉 稔、溝口 到、三国 久美、志渡 晃一、西澤 典子、堀内 ゆかり、吉田 晋、岩瀬 義昭、鈴木 一郎、薄井 明、杉原 佳奈、笠原 晴生
(順不同 ○：発行担当)